「自分が本当に求めていたこと」に震災で気づいた

私のキャリアチェンジ
Career Change

医療法人新光会
自由が丘駅前眼科
院長

Vol.11
市川有穂氏
【眼科・00歳】

東日本大震災を機に転職を決意。人生観、医療感の変化に応じ眼科医としての新境地を求める。

Yuho Ichikawa

総合病院に常勤の眼科医として勤務していた市川有穂氏は、2人の子どもを育てながら外科系当直もこなしていた。東日本の大地が大きく揺れたのは、診療の最中。勤務先の川崎から保育園のある品川まで、帰宅難民があふれる街を、市川氏は走り続けるしかなかった。ジョギングが趣味という市川氏だが、このときの胸苦しさは今も忘れられない。そして、震災後のある当直の日、漠然としていた転職の考えは決意に変わったという。転職が成功だったかを聞く前に、市川氏の満面の笑顔が飛び込んできた。

文・撮影/エムツーフォト

BEFORE

3.11。あの日を境に新しい使命感が生まれる

2011年3月11日午後2時46分、揺れつづける大地を見つめながら、市川氏は恐怖に震えた。今すぐ、子どもたちに会いたい。勤務時間が終わるや否や病院を飛び出し、保育園に預けた子どもを迎えるために川崎から品川まで走り続けたという。

「あの日、街を走りながら感じた胸の苦しさは、たとえようがありません。自分は幸いにもその程度の苦痛でしたが、後にテレビで被災地の映像を見るたびに何もできない自分の無力感が心に広がり、辛さが増していきました」

慶応義塾大学を卒業後、医局人事で病院勤務をしてきた市川氏の日々は、整形外科医の夫との間に授かった2人の子どもの世話と眼科医療の両立を懸命にはかることで成り立っていた。両親や社会への恩返し、常勤をつづける女性医師が少ない医局の中で自らパイオニアとなり道を切り開きたいとの願いが、どんな状況でも眼科診療をつづけ、さらには子育てにも手を抜かない生活を支えていたのだろう。きわめて責任感と使命感が強い市川氏が、震災を境に自らのあり方を問うたのは、ごく自然な心の動きだった。

「眼科医は他科の当直も行っており、私は外科系当直をしていました。当直がそれほど混んでいる医療機関ではなかったため、長い当直時間にさまざまな考えが湧き上がってきました。

今、自分にできることは何か。自分本来の眼科にもっと集中すべきではないか。そうした思いがあふれ始めると、もともと外科ではないのに担当していて片身の狭かった外科系当直が、時間的にも心理的にも重荷になってきました」

一般診療だけでなく矯正診療も手がけたいと

被災地の情報から、「眼鏡やコンタクトに困っていないだろうか」と憂慮したそうだ。

「眼鏡やコンタクトに不具合がある と、たちまちQOLが損なわれてしまいます。まして、あのような大震災では、どれだけ多くの被災者の方々が不便な思いをしているのではないかと想像するに心が痛みました」

ちなみに、目のQOLには視力矯正のための眼鏡やコンタクトレンズが欠かせないが、総合病院の眼科では取り扱わない施設が多い。眼鏡販売店に患者のカルテを開示すれば、個人情報が守れないというのが理由のようだが、市川氏には納得できず、そんな点も彼女の転職へのモチベーションを上げたのかもしれない。

「患者さんのためを思えば、本来は、一般診察と屈折矯正の両方で初めて、QOLを含めたトータルな眼科医療になります。手術が成功しても矯正が必要な場合もありますし、老眼鏡にも専門的な知識が必要です。

他科の当直がなくなったとしても、このまま医局人事の中で眼科医を続けるのは、医療の観点からは同じアプローチにすぎません。ちょうど白内障手術件数が1000例を超えたこともあり、新境地を求め思い切って医師斡旋会社に登録しました」

担当者の対応の良さと的確な提案に大満足

いくつかの医師斡旋会社に登録した市川氏が、最終的に選んだのは担当者に好印象を受けた会社だった。

「どの医師斡旋会社でも、基本的には丁寧な対応の方が多いのですが、特にその会社の担当者は行き届いていると感じました。たとえば、転職の話はなるべくひっそりと進めたかったので、他社の大きな声の担当者は敬遠してしまいました(笑)。

また、他社よりも、自分の提示した条件に合う医療機関を的確に探していただいたという実感があります」

市川氏は条件を斡旋会社に提示する前に、まずは自身の中で「収入、時間、場所、眼科へのアプローチ方法」などを事柄ごとに整理したと話す。

「続かないような無理な条件では意味がなく、続けられる条件を一つひとつ熟慮してから提示しました。その条件に沿う現在のクリニックの案件をいただき、勤務地の近さも手伝って即決しました」

震災が気づかせてくれたことがある。長く続けていくために必要な条件が明確に整理され、新たな一歩となった

女医を続けるには体力も気力もいる。無理のない働き方のひとつとして私が選んだ道を知ってもらいたい。

AFTER
院長として勤務するという新しい働き方に出会った

市川氏は現在、医療法人新光会が運営する自由が丘駅前眼科に院長として勤務している。

「最近の傾向として、大学病院の勤務医からクリニックの院長になるケースが増えていると聞いていましたが、自分がそうなるとは思ってもみませんでした。

実際にクリニックで働き出すようになって、すぐにすばらしい医療環境だと関心しました。レセプトや保険などの知識は自分でも獲得していく必要がありますが、しっかりと教育された専門のスタッフがいてくれるので、診療に集中できるのが何より助かりますね。こちらで手術のできない患者さんは、近くの東京医療センターに紹介する連携システムがしっかり整っているので、安心して治療にあたれます」

同クリニックではレーザー治療や小手術もでき、総合病院では扱っていなかった眼鏡やコンタクトレンズの取り扱いもある。市川氏がめざしていた、トータルでの診療が実現。

「患者さんがより良い視界を得るために、常に慎重な診察を心がけています。オーナーではなくとも院長の立場ですので、すべての診療責任は私にあります。このプレッシャーがモチベーションにもなっています。

視力矯正の診察にも携わることができ、視機能の面からはもちろん、美容やスポーツを目的とするコンタクトレンズへのニーズが予想以上に大きいとわかり、そうした方々の目の健康状態を診ることはとても重要だと再認識できました」

理解を示してくれている夫に最大限の感謝を捧げたい

2人の子どもたちとクリニックの前を通るときには、「ママはここでおめめのお医者さんをしているのよ」と話すそうだ。その言葉に、子どもたちの瞳はひときわ誇らしげに輝く。

「クリニックという勤務先を得て、『ここが自分の居場所だ』と子どもたちに伝えられるのはうれしいですね。

クリニックが自宅に近いので、もともとご近所付き合いをしていた方の視力矯正などを手がけることもあります。本当に地域に根ざした医療という感じで、総合病院にはない患者さんとの交流を味わっています」

当直がなくなったため、子どもたちと粘土遊びをしたり、ジョギングをする時間も生まれたと話す。

「生活にゆとりができ、家族みんなが喜んでくれています。現在の仕事を趣味のジョギングにたとえると、まだ新たなレースのスタートを切ったばかりで、苦しい登り坂はたくさんあると思いますが、一つひとつ焦らずに、確実に乗り越えていきたいです。そして何より、自分の進みたい道に理解を示してくれた夫には、本当に心から感謝しています。同じ勤務医として、これからも互いに労苦をわかち合い、高め合いながら、保険医療の指定許可が取得できないために、コンタクトが医師の管理・責任のもとに検査されず、眼病が起きやすい状況にある点に素朴な疑問を感じました。このシステムでは、医師はコンタクトレンズを販売するためだけの存在で『目の健康』を守れないと痛感。そこで、眼科の一般診療はもちろん、眼鏡やコンタクトレンズも含め、目で困っているすべての方々に対応できる組織をつくろうと新光会を設立しました」

販売店では、花粉症やアレルギーを起こしていても、保険適用にならないので薬をあまり出せなかった。

「どこを居場所にしようとも、眼科医は病気の早期発見と早期治療のために検査や診察をして目のQOLを守るべきです。こうした理想を具現化するには、実力のある眼科医が欠かせません。私たちはこれを第一に考え、有能な医師との信頼関係を築き、また、高水準な医療スタッフの採用、育成に努めています」

有能な医師の条件を具体的に問うと、「実力、経験、お人柄。この3つに尽きますね」と確信に満ちたシンプルな答えが返ってきた。

女性医師が働きやすい環境を積極的につくっている

子どもを持つ女性医師のために労働環境整備にも積極的に取り組む。

「どんなに優秀な女性医師でも、医療と子育ての両立は難しく、有能な方が現場を離れざるをえない姿に何度も接し、そのたびに歯がゆい思いをしてきました。そこで、出産や育児と眼科医療を両立していただけるよう、保育・教育施設等との提携をはじめ、女性医師をサポートできる環境づくりをしています」

新保氏は、女性が備えているきめ細かな対応や柔らかい物腰など〝おもてなしの心〟こそ、これからの医療機関には必要だと考えている。

「その点、市川先生は感じがいい上にお人柄もすばらしく、患者さん、スタッフからも厚い信頼を得て、当グループ全体にもよい影響を与えてくれています。感謝しています」

順調な発展を遂げている新光会。今後の抱負をうかがった。「これからは、クリニック数の拡大よりも、当グループのノウハウをコンサルティングすることに注力したいと考えています。〝2・5倍の患者数〟実現のメソッドを、開業中や開業予備軍の先生にお伝えしたいですね」

保育園に通う2人のお子さんと。「子どもたちのためにもがんばりたいし、また、後に続く、同じ境遇の女性医師のためにも、自分の働き方がヒントになれば、と考えています」

市川氏のキャリアの軌跡】

2000年　慶応義塾大学卒。医師免許取得。慶応義塾大学病院勤務
2002年　日野市立病院医員
2004年　慶応義塾大学病院専修医
2004年　横浜市立市民病院医長
2005年　藤島眼科医院、眼科専門医資格取得
2006年　日本鋼管病院医長
2011年　自由が丘駅前眼科院長

医療法人新光会理事長

WELCOME
アルバイト時代の疑問を医療法人設立に生かす

医療法人新光会の特色は、独自の眼科医療と経営方法にあると言っていいだろう。総合病院では撤退さえしている眼鏡・コンタクトレンズ分野を積極的に取り扱い、トータルな眼科医療を提供するとともに、質の高いスタッフの育成や業務の細部にいたるまでマニュアル化とシステム化を徹底的に推し進めた経営で、一般眼科の2・5倍という驚異的な患者数を誇っている。

「眼鏡・コンタクト販売店で眼科医としてアルバイトをしていたころ、

新保 光一郎氏
医療法人新光会理事長

Koichiro Shinbo

1984年杏林大学医学部医学科卒業後、同年に東京大学医学部医学科公衆衛生学教室に研究生として入室。1986年東京都医系技官合格、同年に東京都庁・保健所・東京都立病院に入職。1990年宮町眼科医院開院、院長に就任。1991年医療法人新光会設立、理事長に就任。以降、現在まで眼科10施設を開院する。

医療法人新光会
※写真は自由が丘駅前眼科

医療法人新光会は、眼科医のいない、あるいは少ない地域に眼科医院を積極的に開設し、経験と実力を備えた眼科医の診療で地域医療に貢献することを目的に設立された。眼科医療と同時に、メガネ・コンタクトレンズの処方取り扱いを行う。経営理念は、「目の健康と視力を守ることを使命とする」。

埼玉県と東京都に10カ所の分院があり、自由が丘駅前眼科はそのひとつ。土・日・祝日も診療を行っている。

【病院Data】
●正式名称／医療法人新光会
自由が丘駅前眼科（以下、自由が丘）
●所在地／埼玉県さいたま市南区別所7-2-1
MUSECITYザ・ファーストタワー武蔵浦和メディカルセンター2階
自由が丘：東京都目黒区自由が丘2-11-10　パルシィード1階
●設立年月日／1991年（自由が丘：2010年）
●診療科目／眼科
●病床数／なし
●常勤医師数／12名（自由が丘：1名）
●非常勤医師数／25名（自由が丘：3名）
●患者数（1日）／670名（自由が丘：60名）

00ページからの全国求人情報もご覧ください！